

第3話 : やっぱり家はいいよネ♪

内 容	音楽など
<p>医師「残念ながら、今後は治すというより、 対症療法が中心になります。 残された時間は長くありません。」</p> <p>面談室に呼ばれた私を待ち受けていたのは 主治医の中村先生からの信じられない言葉だった。 手術に、抗がん剤治療にと、 母は泣き言ひとつ言わず、 本当によくがんばってきたのだ。 いつか必ず良くなると信じていたのに・・・。</p> <p>医師「緩和ケア病棟を探すか、それともご自宅で過ごされるか、 ご家族でよく話し合ってください」</p> <p>医師「病院内のがん相談支援センターをご紹介します。 ここで相談してみてください」</p>	

私は先生が、急に遠くに行ってしまったように感じた。

30分後、私はがん相談支援センターで、

石橋さんという相談員の男性に、

母と私の状況を説明していた。

相談員「状況、よくわかりました。おつらかったですね。

でも、どうかお一人で抱え込まずに、

ここではなんでもお話してください」

こらえていた思いと一緒に、涙が一気にあふれ出した。

娘「母がいなくなると思うと・・・。

それに、信じていた先生にも

見放されたような気がして・・・」

相談員「先生も、気にかけてくださっているからこそ、

私どもをご紹介くださったんです。

これからは、私たちもお力になりますから」

娘「母は・・・入院するたびに、早く家に帰りたいたと

言っていたんです。

できれば家で過ごさせてやりたい。

でも、私の仕事もあるし・・・」

相談員「お住まいの近くに、がん患者さんを往診してくださる

クリニックの先生がいます。

一度、お話を聞きに行ってみてはいかがでしょうか」

あわただしく日々が過ぎた。

再びがん相談支援センターを訪れ、石橋さんに報告した。

娘「やっぱり自宅で看ることに決めました」

相談員「そうですか。

お母様の気持ちを第一に考えたいという

娘さんの優しさを、僕は尊敬します」

介護保険の申請をはじめ、

石橋さんの的確なアドバイスのおかげで、

なんとか母の退院日に間に合わせる事ができた。

往診で痛みの緩和をしてもらい、

母の体調も今のところ安定している。

なんとか私の仕事もやめずにすんでいる。

母「やっぱり家はいいね」

母がしみじみとつぶやくとき、

私は本当によかったと思う。